ルイズと名探偵

にゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルイズと名探偵

【Ｎコード】
Ｎ１１８９Ｍ

【作者名】
にゅう

【あらすじ】
虚無の担い手であるルイズは、使い魔のサイトと共にサイトの元の世界である地球の日本に何かしらの影響により、飛ばされてしまう……。
飛ばされた先は、なんと殺人事件の現場だった。
ルイズはサイトを連れて逃げようとするが……。
原作知らなくても読めます。

密命　ルイズサイド（前書き）

キャラを崩壊しないようにがんばりたいと思います……。
ゼロ魔側はルイズとサイトしか殆ど出てこないと思います。

密命　ルイズサイド

ハルケギニア……トリステイン魔法学院。
失われた魔法の系統――虚無を使うことができるルイズは、トリステインの女王アンリエッタの密命により、とある洞窟を調査していた。

「まったくもぅ姫様も姫様よ」
「仕方ないだろ……姫様の密命なんだから」
サイトと共に調査に来たが、ルイズは退屈で仕方がなかった。
アンリエッタに密命を貰ったことは正直嬉しかったものの……ただのどこにでもあるような……洞窟の調査だ。

「姫様によれば……ここに何かあるらしいんだけど……」
ルイズは周囲を見渡すと、暗い洞窟の奥へと進む。
歩を進めるたびに、視界が漆黒の闇で覆われていく。
「魔法のランプ使えよ」
「仕方ないじゃない……忘れちゃったんだから、我慢しなさいよね」
ルイズは視界の奥にある、小さな淡い黄色の光を瞳孔に捉えた。
「あそこに光があるわ……まっすぐ進めばすぐつくみたい」
ルイズとサイトは歩むスピードを速めて、淡黄色の光の下へと向かった。

＊

光を放っていたものの正体は小さな銅像だった。
「銅像はゴーレムに似てるわ」
「ギーシュのに似てるな」
ギーシュは、ルイズの生徒で土系統の魔法を使うことができる。
彼はゴーレムという土で作られた人形を作ることができる。

「サイト、姫様の言ってた何かってこれじゃない……？」
ルイズは黄金色で発光している銅像を手にすると、サイト共に出入り口に向かおうとする……。
しかし視界が、黄金色の膜のようなもので覆われて……。

飛ばされた先で　ルイズサイド

ルイズは……意識が鮮明になるにつれて、サイトの名前を呟いていた。
「おい、ルイズ大丈夫か？」
サイトはルイズを起こしてくれた。ルイズは、
「ねぇ、ここどこなの……？」
ルイズは意識がはっきりしたところで、辺りを見回した。
辺りには大きな箱がいくつも並べて置かれており、海がある。
海面は凪いでいる。塩のにおいを纏わせたそよ風がルイズの耳元を過ぎ去っていく。
「ここはたぶん……俺の世界だ」
「え、サイトの？」

ルイズはあたりに置かれた箱について尋ねると、
「コンテナだよ」
「こんてな？」
「コンテナっていうのは……簡単にいうと、いろんなものを入れて運べるんだよ」
「これなら、学院が半分くらい入っちゃうかも」
流石にそれは無理だろ……とサイトは苦笑いを見せた。

ルイズは夜空を見上げた。漆黒の天蓋には、煌く星の群れがある。
「サイトの世界には月が一つしかないのね……」
「ハルケギニアには二つあったもんな」
ルイズは急に故郷が恋しくなった。
サイトの気持ちもだいぶ分かった。
いきなり自分がいた世界じゃない世界に来て……それでいきなり私の使い魔にされたんだから。

困惑して辛くて……。

ルイズが黙考していると、近くで聞いたこともない音が轟いた。
「銃声か！」
「じゅうせい？」
「ルイズお前はここで待ってろ！　俺は様子を見てくる」
「あ、待ってサイト！」
ルイズの言葉を聞く余裕もなさそうに、サイトは慌しそうな様子で駆け出していってしまった。
＊

何分たったのかは分からない。
サイトはどこかへ行ってしまってから、姿を見せない。
さっき聞いた音は何だったのだろう？　サイトはじゅうせいと言っていた。
何かが飛ぶ音だった……。
ルイズは気になって、音のした方へといってみることにした。

しばらく歩くと、地面に小さな赤いものがあるのを見つけた。
「これって血痕？」
ルイズは血痕を見て、顔の血の気が引いていった。
徐々に顔が青白くなっていく。
ルイズは血痕があった不安と、サイトが様子をぜんぜん見せないことで胸がざわついた。

ルイズはしばらくまた歩いた。
しかし顔つきは無表情でも、心中では血のことでいっぱいいっぱいだった。
「兄貴、奴はまだ見つからんのですかい？」
「あぁ……坊主のくせにすばしっこい奴だな」

コンテナの陰から若い男二人組だと思われる会話が聞こえてきた。
ルイズはそっと息を潜めて、若い男二人組をコンテナの陰から見つめた。
男たちは黒い服を全身にまとっている。一人は痩せていて髪が長く、眼光が鋭い。
もう一人は顔を眼鏡のような黒いものをかけていて、目つきがよく分からない。
体つきはふっくらとした体型。
二人の会話から察するに、目つきが鋭いほうが立場がいいのだろう。

「ひゃ……何すんのよ！」
ルイズは、いきなり後ろから口を押さえられた。
「黙ってろ、俺だ」
「あ、サイト！　どこに行ってたのよ！」
ルイズはサイトが無事だったので、安堵した。
「お前こそ、何で待ってろって言ったろ！」
サイトは小さな声で、ルイズを一喝する。
「サイト、だって何分も来なかったじゃない。待ってたのに」
「仕方ないだろ！　様子見に行ったらさ……」
サイトは言葉を続けようとしたが、喋るのをやめてしまった。
何があったのだろう……ふとルイズはあるものを思い出す。
それはサイトを探しに行った途中で見つけた血痕。

「何サイト？　何かあったの」
「……人が殺されていたんだよ」
サイトは顔を俯きかげんにして、その言葉を放った。
「殺されていたんだよ、俺見ちまったんだ。男の人が殺されてるのを」
「じゃああんたが言ってた、じゅうせいって」

「そうだよ。あれは人が殺害された音だ」
ルイズはその言葉を聞いて、頭の中が白い世界になっていく。
「銃声は、銃というこの世界の武器が使われるときに起こる音だ。人を簡単に殺せるんだよその武器は」
「簡単に殺せるなんて……なんて恐ろしいの」
ルイズいる世界の戦争に使われる武器は槍だったり矢だったりする。
それは打ち所が良ければ助かるけど、サイトの世界の武器は――。
「それでさ、そこで俺さ犯人を見ちまったんだよ。そいつらはすぐそこにいる」
「そいつらってさっきの二人組のこと？」
「うん。そうだ」
ルイズはそれを聞いて、倒れそうになる。
二人とも怪しく危ない雰囲気をかもし出していた。
近くにいるんだ。殺しを犯した奴らが。

「サイト逃げましょうよ！」
ルイズはサイトの手を引っ張り、逃げようとする。
しかし、サイトは、
「ルイズ、お前だけ逃げろ！」
「え？　そんなの絶対駄目！　使い魔のあんたを置いていくなんて主人として恥ずべきことだわ」
サイトをそれでもルイズは引っ張ろうとした。
今ここにいたら絶対危険だ。
「駄目だ。俺は最後までお前を守る義務がある」
「だったら私のそばにいなさいよ！　あんた、私の使い魔なの？」
サイトはその言葉を聞いて、一瞬口篭ってしまう。
それでも、
「駄目だ！　ルイズ、お前はここにいろ！　俺はあいつらがいないかどうか見てくる」

「でもサイト、もし見つかったら……」
「大丈夫だよ！　俺にはデルフがあるんだ！　ルイズもし俺になんかあったら工藤新一を頼れ」
そう言い残して、サイトはさっきと同じくルイズを置いていってしまった。
「待って！！」
いやな予感がした――今までに感じたことのない予感が。
もう二度と会えないような――そんな予感が。

飛ばされた先で　ルイズサイド（後書き）

例の二人組です。いきなりですが；

捜索　ルイズサイド

何時間たったのだろうか。空は段々白みはじめて、海面が青色に染めあげられていく。
サイトはいつまでたっても来なかった。
それに例の二人組の気配すら感じなかった。
もしかしてサイトに何かあったのだろうか？
そう思うと余計に顔色が悪くなっていく。
でも、サイトにはどんな魔法でも打ち消すデルフがいるじゃない……でも、ここは魔法がある感じすらしない。
そうだ。サイトはここが自分の世界だと言っていた。
もしかしたらだけど、ここではデルフのは効かないのかも……。
ルイズは徐々に血の気が引いていくのを感じた。
とりあえずここにいても仕方がないと思った。
探そう。アイツを。

＊

ふと気がつくと、空がコバルトブルーに色づいていた。
今は何時なのか、分からない。朝だとは分かるけど。
コンテナの置いてある場所を隅々まで探したのに、けっきょく見つからなかった。
海を見つめた。
どうしよう。もう当てにできる人もいない。
ふと、海面に漂う服を見つけた。
あれは……。
「サイトの服じゃない！」
あれはいつもサイトが着ている、水色の服だ。
服の名前は知らないけど……。

「拾わなきゃ！」
漂っている服を掴んで、拾い上げた。
「サイトのじゃない！」
かすかにサイトのにおいがした。
これは間違いなくサイトのものだ。デザイン、サイズが一緒だ。
サイトの服を思わず抱きしめた。
でもでも、何でサイトの服が……？
海の水で濡れた服全体を見回した。
「これって……？」
ルイズの瞳が色を失う。
服にはないはずの、赤いものがついていた。
「血……！」
顔が俯きがちになった。
言葉がのど元で引っ掛かり出てこない。
サイトはあの二人組にでもやられたのだろうか……？
それにしては服についた血の場所がおかしかった。
血が服が首元にあたる部分についていたのだ。
付着している量もおかしい。ちょっとだけだった。
服が何で海面上を浮いていたのか分からない。
それだけが引っ掛かる。
「でも、これからどうしよう」
コンテナが置いてある場所を全部探したのに、サイトはいないみたいだった。
デルフも見つからなかった。
例の二人組もいなかった。
これからどうすればいいのだろう。
でも、サイトのことが心配だ……。
サイトは今どうしてるのだろう。
生きているに決まっている。
あの二人組にもし……と考えてしまうのは駄目だ。

絶対サイトは生きている。。サイトどこにいるの？
でもあてがない。どうすれば――

『ルイズもし俺になんかあったら工藤新一を頼れ』
昨日のサイトの言葉がルイズの脳裏を過ぎった。
「サイト……」
とりあえず、人がいるところに行ってみよう。
近くに大きな塔の並びが見えたから。

見たこともない町　ルイズサイド

「これがサイトの世界なのね……」
早速塔の並びが見えた場所まで来てみると、人、人人。
周りをよく見ると、ルイズの世界では作れないような技術の塔や異世界の文字が書かれた大きな板がたくさんあった。
それに人は見たことも無いようなカラフルな衣装を着て、髪型や性別年代もバラバラだ。
これがサイトの世界なんだ……。
それに人々は小さな箱を耳に当ててなにやら喋っている。
何をしているのだろう……。それに見たことも無い大きな箱が走っている。
人が歩く道とその箱が走る道が分けられているようだ。
「これがカガクなの？」
昔サイトが話していた魔法とは別の技術……カガク。
サイトが着ている服やのーとぱそこんとか言うのも、カガクらしい。
歩いていると、のーとぱそこんらしきものが置いてある店だと思われるものを見つけた。
画面にはなにやら海が映し出されている。海の横には文字が書かれていた。
ルイズには文字が読めないので、何が表示されているか良くは分からない。
「でも、どうするの……工藤新一とかいう人がどこにいるのか分からないわ」
誰かに聞いてみようか？　でもそれは勇気のいることだ。
いきなり知らない人に聞くのは……。

「工藤新一さん知りませんか？」
そこら辺にいる人に勇気を振り絞って尋ねた。
聞いたのは桃色の服を着た女性だった。
髪の長さは腰辺り。それに、黒髪に漆黒の瞳。
サイトも黒い髪に黒い双眸（そうぼう）。
そういえばあのメイドも黒髪に漆黒の双眸だった。
あのメイドとサイトが仲いいのは、メイドがサイトの故郷の人種の特徴を持っていたからなのか？
女性は訝しげそうにルイズを見つめる。
「工藤新一さん？　彼って高校生探偵よ。東の工藤って呼ばれてるわね」
その様子からするに、それ以上のことは知らないのだろう。
でも、それでも大分収穫だった。
（たんてい？　聞いたことないわね……どこにいるか知ってるかな？）
「さぁ……どこにいるかまでは知らないわ」
それ以上詳しい話は知らないようだ。
でも有名な人物らしい。
ルイズは女性にお礼をいうと、ほかの人に聞いてみることにした。

サイトのことを相談できるのは工藤新一という人物しかいないのだ。
でも会ったとしても、なんて説明すればいいのだろう？
自分が異世界から来た人間で魔法を使えるというのは通用しないだろう。
サイトのことはそれになんて話す？　この世界から来て私の使い魔にされたというのも信じてくれないかもしれない。
私だって、最初はサイトが異世界からきたなんて信じられなかったくらいだ。
それは伏せておくべきかもしれない。

ルイズはその後も聞きまわったが、最初に聞いた女性と同じように訝しげな視線を向けられた。
それはルイズが一見外国人なのに、某魔法映画に出てくるようなマントをつけていたということ。
が、ルイズはサイトのことや工藤新一を探すことで頭がいっぱいだったので、そのことにはまったく意識がいかなかった。
工藤新一で分かったのはこうこうせいで、たんていという職業の少年だということ。
それに、東の工藤と言われていて、家族がとても有名人なこと。
そして、最近は音沙汰なしということ。
「行方不明なのかしら……もう当てがないのに私どうすればいいの？」
空が橙色になり、太陽が赤くなっていた。
ルイズは大きな木でつくられたものの上に腰掛ける。
人も周りにはいない。
人気がない場所なのだろうか？
周りには緑色の小さな林と、色とりどりの花が生えているだけだった。

もうどうすれば分からない。腹もすいていた。
でもこの世界のお金なんて持ってないし、第一貴族の自分が平民と同じような食事をするなんて考えられなかった。
こんなところでプライドが働く自分に少しイライラする。
町で何かを食事している人がいたりしたりすると、羨ましかった。
それに眠気も襲ってくる。昨日サイトを待っていたので、ずっと寝てない。
ここで寝たら何をされるか分からないし、もしかして昨日あの二人組に姿を見られている心配があった。
サイトがいないのに、同じ場所でずっとすごすのは不安だった。

「工藤新一に会えれば……」
ふと呟く。
もう誰でも良かった。工藤新一を良く知ってる人なんて、あまりいないのかもしれない。
気づくと、黒髪に眼鏡をかけた少年が視界に入ってきた。
「――工藤新一さんを知りませんか？」
我に返ると、その少年に尋ねてしまっていた。

見たこともない町　ルイズサイド（後書き）

あのメイドと文中に出てきますが、シエスタというメイドのことです。
曽祖父がサイトと同じ世界から来た日本人で、日本人の血が８分の１ひいているので黒髪に黒い瞳を持っています。
学院で働いていて、サイトに恋心を抱いている少女です。
説明不足ですみません。

上の話とは関係ないのですが、タイトルの〇〇サイドを入れるのをやめようか検討中です。

不思議な少女（前書き）

7月6日
一部見落としのところがあったため大幅に書き加えと設定の変更があります。
まことに申し訳ありません。

不思議な少女

「――工藤新一さんを知りませんか？」
彼の目の前に現れて、唐突にその言葉を放ってきたのは桃色のブロンドの髪に鳶色（とびいろ）の瞳に目鼻の整った顔立ちに、スレンダーな体型を持った妖精のような少女だった。
服装は黒いマントをつけていて、白いワイシャツにどこでも見るような黒いミニスカートをはいていた。
ワイシャツの襟部分に五芒星（ごぼうせい）が彫られた黄色のアクセサリーらしきものをつけている。
見た目はいかにも異国――いや、もっと遠くからきたというような容貌。
魔法使い作品に出てくるような、どこかのアニメで出てくるようなかんじの女の子。
それに彼女のおかしいところは見た目と反して、水色のパーカーを抱きしめていること。
「ねぇお姉さん新一兄ちゃんになんか用なの？」
怪しげな視線を少女に向けた。
すると、
「サイトを助けて！　サイトをどうかどうか探してください……」
少女は涙目になりギュッとパーカーを抱きしめる。
尋常じゃない様子だ。きっと何かあったのだろう。
事情を聞くのは、何が起こったのかを聞いてからだ。

＊

「ねぇ、サイトって人、お姉ちゃんのなんなの？」
「サイトは私の使い……いえ、大事な友人です」
何かがおかしい。少女は、何かを言おうとしていたようだ。
しかし、なぜそれを止めたのだろう？　しかし彼女の様子からす

ると、大事な人であることには代わらないらしい。
何かがおかしい。少女は、何かを言おうとしていたようだ。
しかし、なぜそれを止めたのだろう？　しかし彼女の様子からすると、大事な人であることには代わらないらしい。
それにサイトという名前聞いたことがある。
そうだ。思い出した。
自分が高校生のときに、担当したとある銀行の強盗事件の現場を目撃したという平賀才人という少年だった。
年は同じ高校生だったのを覚えている。
「それよりさ、お姉ちゃんの名前教えてよ？」
「私は……ルイズよ」
聞きなれない名前だ。ヨーロッパ系か？
「僕は江戸川コナン」
「コナン、あのね話をきいて。新一さんを知ってるみたいだから、その人に伝えてほしいの」
少女は涙をこらえながらも、必死な顔つきで昨晩起こったことを話してくれた。

「ねぇルイズさん、本当に髪が長くて鋭い眼光を持った男性と、黒い眼鏡のようなものをかけた男性を見たの？」
「うん」
「その人たちってさ、全身黒づくめだった？」
「うんそうよ。確かに見たの」
どうやらルイズの言うことに、嘘は無いらしい。
だとすると……ルイズの見たという二人組は間違いなくジンとウォッカだ！
でもなんで二人が、杯戸港になんかいたんだ？
それにルイズと一緒にいたという才人が聞いたという銃声と、ルイズが見つけたという血痕。
さらに彼女に詳しい話を聞くと、才人は男性が殺されているのを

見たという。
それに彼女を置いて朝になっても来なかったという才人。
その後ルイズの捜索によって見つけた才人のだと思われるパーカー。
このことを灰原には話さないほうがいいのだろうか？
「ねぇルイズさん……本当なんだよね？」
「嘘じゃないわ……」

コナンは顔が俯きがちになり、これからどうすべきなのかを黙考する。
灰原には話さないほうがいいのかもしれない。
彼女のことだ。また狙われる可能性だって十分にあるのだ。
それにルイズという少女、どこかおかしい。だけど、今優先すべきなのはルイズの身の安全だ。
見られていないといっても、もしかしたら姿をちょっとでも目撃されているのかも知れないのだ。
それにジンとウォッカが探していたという……『坊主のくせにすばしっこい奴』というのは才人かもしれないのだ。
「ねぇお姉さんこれからどうするの？」
「もういく所も無いのよ……私ここで待つわね」
「誰を？」
「新一さんとサイト」
どうやら彼女は身の危険をよく理解していないようだった。
彼女は今才人のパーカーを持っているし、現場にいたのだ。
ジン達の話からすると、才人がパーカーを着ているまま目撃された可能性が高い。
しかも彼女は才人のことを今一番良く知っている人間。
どこにも当てが無く危険だといのに、ここで新一を待つというのは死を覚悟しているようなものだ。

「ねぇルイズさん、新一兄ちゃんには伝えておくけどここにずっといるのは危険だよ」
「どうして？」
ルイズがきょとんと首をかしげる。
そこにはかわいらしさが出ているものの、どこか寂しげだ。
「詳しいことは言えないけど……ルイズさんが目撃した二人組はとっても危険な人たちなんだ」
コナンはルイズに真剣な顔つきを見せた。
「危険な人……？　サイトサイト！　二人組のことを知ってるなら教えて！」
ルイズの目が濃霧に包まれて、サイトの名前を叫んだ。
再びルイズの目から星が流れ落ちていく。
「ルイズさん大丈夫だよ！　安全な場所に連れて行ってあげるよ」
「サイト、サイトいやよ！」
コナンはルイズの腕を引っ張り、あの場所へと急いだ。

不思議な少女（後書き）

コナン視点です。今回は誰サイドなのかをタイトルに書きませんでした。
まだ序盤ですが、読んでくれている方がいらっしゃってとても励みになります。

ルイズについて（前書き）

7月6日
大変な見落としのところがあったため大幅に書き加えと設定の変更があります。
まことに申し訳ありません。

ルイズについて

コナンはルイズを阿笠邸へ連れてきた。
今ルイズのことを話せるのは、阿笠しかいないからだ。
何せ今回は黒の組織が関わっている。
阿笠邸には灰原がいるが、彼女にはルイズが外国人で殺人事件を目撃してしまったと説明しておこう。

「どうしたんじゃ？　しんい……」
早速ドアをノックすると、阿笠博士が出てきた。
博士に耳打ちでルイズのことをコナンは説明すると、家の中へと入った。
「なるほど、例の二人組みを目撃したということか」
「そうなんだ、博士！　それに銃声を聞いたらしい」
コナンはさっきからソファーの上でうずくまるルイズを、なだめようとしていた。
「サイトが、サイトが！　お願いします、新一さんの知り合いなんですよね？」
ルイズは涙で濡れた顔をコナンから受け取ったタオルで拭いていたが、まだ涙がこらえきれないようだった。
「そのサイトという……なまえどっかで聞いたことあるぞ」
「平賀才人。数ヶ月前、秋葉でノートパソコンの修理に行った以来行方知れずの十七歳の高校生」
コナンはその名前を知っていた。いきなり秋葉原で姿を消した高校生で、自分が昔担当した事件の目撃者。
その後もしばらく連絡を取り合っていたことがある。
失踪した当時の服装は水色のパーカーに長ズボンを穿いていたとか。
当時は驚いたものだった。あの才人がいなくなってしまったのだ

から……。
何ヶ月か前に姿を突然くらました少年が、いきなりルイズという外国人の少女とひょっこり現れたのだ。
これはおかしくないか。
「そうだよね？　ルイズさん」
「コナンのいう通りよ。本名はヒラガサイト。私の大事な……」
ルイズは何を言おうとしたのか、また口をつぐんでしまう。
何を言おうとしたのだろう？　何か言いたくない事情でもあるのか？
「ねぇ、コナン、阿笠さんサイトを探して！　工藤新一さんに会わせて！」
「じゃが、新一は……」
「おねがいします！」
コナンは俯きがちになる。
自分は当の本人だけれど、まだこの子には話せない。
どれにルイズも何か隠している様子だ。それに普通に見ないような容貌。
「ねぇコナン、例の二人組は何なの？」
「それはおって話すよ」
コナンは言葉を続けることができない。
何しろ二人組はジンとウォッカだ。
ルイズを危険な目にあわせるにはいかない。
それに幼児化した人間だということが信じられるだろうか？
言わないほうがいいかもしれない。何も手がかりが無い今は。
＊
その後ルイズは軽い食事を終え、ソファーで寝てしまっていた。
その寝顔は二人に遭遇したとは思えないくらい何かを隠しているとは思えない、天使のような顔だった。
「なぁ新一君、例の二人組って……」
「あぁ、ジンとウォッカだよ！」

ルイズが寝に入ってしまった後、阿笠とコナンは小さな声で会話を交わしていた。
「どうするんじゃ？　才人という少年は二人組に会っている可能性が高いのじゃぞ？」
「分かってるさ。けどな、情報が足りねーんだよ」
ルイズの話では情報が少なすぎるのだ。
突然港に現れたジンとウォッカ。それに鳴り響いた銃声。
ルイズが才人の捜索の途中で見つけたという血痕。

一番の問題は黒の組織だが、ルイズと才人のことも気になる。
異国離れした雰囲気をまとわせ、大きな何かを隠している少女ルイズ。
それに秋葉で突然失踪したのにもかかわらず、ルイズと姿を現し、工藤新一を頼れと言った平賀才人。
「博士、灰原には殺人現場にたまたま居合わせて犯人の顔を見てしまったとか説明しておいてくれ」
「分かったよ、新一君」
灰原には黒の組織のことは話さないほうがいいだろう。
彼女は黒の組織に現在でも追われているのだから。

ルイズについて（後書き）

今回はコナンサイドでした。
サイトの失踪が数ヶ月前となっています

大人びた少女（前書き）

後書きにお知らせがあります

大人びた少女

ルイズの目の前には、漆黒の空間が広がっていた。
彼女の視線の少し先にはサイトが立っている。
「ルイズ、待ってろよ！」
サイトはルイズに顔を向けながら、走っていく。
でも、サイトの走っていく方向はルイズのいる場所とは逆だった。
「だめサイトいっちゃ駄目！　サイトー！」
ルイズは精一杯に、無我夢中で叫んでいた。

＊

「サイトー！」
ルイズはサイトの名前を叫びながら覚醒した。
ルイズが寝ていたソファーの目の前にあるテーブルの上に料理は置かれていた。
見たことも無い食材だったが、食べると口の中に塩の味が一気に広がった。
料理を見ると、中に魚の身が入ってるようだった。
「おいしい……何なのこれ」
「おにぎりよ。詳しい事情は江戸川君から聞いたわ」
「あなたは？」
ルイズのそばによって来たのは、切れ長の蒼い瞳に赤みがかかった茶髪の女の子だった。
女の子は大人びた雰囲気（ふんいき）を醸（かも）し出しており、口調からすると冷静で落ち着いた性格の持ち主のようだ。
「灰原哀よ」
哀は、コナンと同い年で彼のクラスメイトで阿笠と一緒に暮らしているのだという。

この世界にも学校があるのか……とルイズは関心した。
でもこの世界の学校は何を学ぶのだろう？　サイトのいうカガクだろうか。
「灰原さん、コナンは？」
「江戸川くんなら、一旦家に帰ったわよ」
彼の帰る家はちゃんとあるんだ……。
「今日休日だから、来るんじゃないかしら？」
「そうなんだ……良かった」
ルイズは安心した。昨日彼は、新一さんに伝えてくれると言っていた。
コナンはきっと新一さんを連れてくる。

「ねぇ、サイトっていう人あなたの友人なの？」
哀が一ページずつ等間隔に近い時間でめくりながら尋ねてきた。
「うん。そうなの。あたしの大事な友人」
「あら？　それにしては彼の名前を叫んでいたけれど？」
「ちっ違うわよ！　あいつが、私に待っててっていうから……」
ルイズはそれを言いかけて、ふと忘れていたことに気づく。
元の世界へ帰る方法は――？
いや、それも重要だけれど今重要なのはサイトの行方だ。
コナンにも哀にも阿笠さんにも異世界から来た人間であることは言っていない。
言わないほうがいいだろう。伏せておいたほうがいい事実だ。
でもコナンはサイトが行方不明になったことを知っていた。
なんで知っていたのだろう？
「そう」
哀は一言言い残すと、本をテーブルの上に置いてどこかの部屋へ向かうようだった。

大人びた少女（後書き）

一週間更新を遅れて大変申し訳ありません。
私自身、皆様の許可を得ず勝手に途中で設定を変更してしまい混乱を招いてしまったことを深くお詫び申し上げ致します。
更新を待っていらっしゃる読者の方々や、今まで読んでくださっている方々に大変なご無礼を致しましたことをお詫び申し上げます。

この度は大変なご迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ありません。
これからも二度とこのような事態を起こさぬよう精一杯執筆に励んで生きたいと思います。
まことに申し訳ありませんでした。

7月12日　月影リュンヌ

現場へ

「あら、工藤君随分早かったのね」
「なぁ灰原、もう彼女とは話したのか？」
「あぁ……ルイズさんのことでしょ？　少し変わった子のようね。それに何か隠しているみたい」
「やっぱりな……」
彼女も察していたようだった。
ルイズと才人はただの友人じゃない。お互いに友人以上の感情を持っている。
それにルイズは何か大きなものを隠している。コナンも知らないようなことを。

「彼女、寝言でサイトのくせにとか言ってたわ。それに……」
コナンはルイズが寝ていたときの様子を灰原から聞いた。
寝言で才人の名前を何度も言っていたという。
それにだいぶうなされ、パーカーを力強く抱きしめて寝ていたという。
ルイズが隠していることを聞き出さなければならないが……。
「ありがとな、灰原」
コナンは灰原に礼を言うと、ルイズのほうへ駆け寄った。

＊

「ルイズお姉さん、これから現場へ行こう！」
「現場って？」
ルイズはきょとんとして、首をかわいらしく傾げてきた。
「ルイズお姉さんとサイトお兄さんが別れたところだよ。実際に行ってみたほうが早いよ」

「どうして。行っても無駄なんじゃないの……」
ルイズが枕を強く抱きしめて、顔をうずめる。
「だって、何かサイト兄ちゃんがどこへ行ったのか分かるかもしれないでしょ？　手がかりがあるかもしれないよ」
「分かったわ」
ルイズが立ち上がったので、コナンは彼女をドアのほうへ引っ張っていった。

現場へ（後書き）

すごい少なめでした。すみません。

手がかり（前書き）

だいぶ投稿が遅れて大変申し訳ありませんでした。

手がかり

ルイズはコナンに引っ張られて、サイトと別れた現場へ行くことになった。
でもどうして、コナンはルイズがサイトと別れた現場が分かったのだろう？
このあたりには詳しいのだろうか？
向かう方法は工藤新一を探すために歩いていた町で見た道を走っている箱だった。
実際に乗ってみると、椅子部分とそれを動かすためのものがあるようだった。
外装は全体が黄色で塗られ、窓があり、横に鏡がついている。
これが洗練された技術……カガク。
鳶色の眼が流れていく景色を捉えていく。
ルイズは窓の外に見える景色を新鮮に感じていた。
――それに馬車よりも乗り心地が良いと思う。
サイトの世界って、何もかも進んでるな……。
（――サイト、絶対無事でいなさいよね）

＊

目的の場所まで来てみると、ルイズがサイトと別れた所だった。
「血痕をみつけた場所教えて」
コナンに言われるがまま、ルイズは二人を案内した。
「これは、血じゃないか！」
「博士、でもつき方がおかしいんだ」
コナンが指摘したのは血痕のつき方。
アスファルトの地面についた血は、一面に広がることなくただ垂

れたような感じで、左端がこすれているのだ。
それに何か血で文字が書いてあったような跡があった。
たぶん犯人が拭いたのだろう。
ルイズもいわれるとなんとなくそうな気がした。
「ねぇコナン、何この紙切れ？」
ルイズは血痕の近くに、なにかの紙切れが落ちていたのを拾い上げる。
「これは、名刺じゃぞ」
「名刺に書いてあるのは……『竜禅院グループ会長竜禅院秀彦（りゅうぜんいんひでひこ）』」
「竜禅院グループといえば、各界で名を轟かしている有名な財閥じゃぞ」
「りゅうぜんいんぐるーぷ？」
ルイズは二人の言っている意味が分からない。
聞きなれない単語がいくつもあり、よく話が理解できなかった。
「有名な金持ちだよ」
金持ちというと、貴族のようなものだろうか？
この世界にも貴族みたいな人たちがいるのか……。
「そういえば、テレビで竜禅院グループの会長が三日前から行方不明とやっていたぞ」
「だとすると……博士」
行方不明に血痕ということは……。
「サイトっていう少年が見た遺体は、俺の推測だと、多分この」
「かいちょうのりゅうぜんいんひでひこ」
ルイズは横文字になりながらもその名前を言う。
サイトはきっとこの殺人を見たんだ。
それで例の二人組っていうのは、きっとひでひことかいう人を……。
「――殺したんだ」
ルイズは目の前が真っ白な膜で覆われていくのを感じた。

現場（前書き）

作中で出てくるガンダールヴは伝説の使い魔のことです。
あらゆる武器を自由に扱える能力をガンダールヴは持っています。
サイトはその証しであるガンダールヴのルーンが左手にあり、能力を持っています。
説明不足で申し訳ありません。

現場

「――ルイズさん大丈夫？」
ルイズが我に返ると、目の前にコナンが立っていた。
ルイズはしばらくボーっとしていたようだ。
だけど秀彦っていう人が死んでるって……。
サイトは殺されるところを目撃したんだ。
それで、その男の人たちを追ったんだ。
「――デルフがいるから大丈夫よね」
ルイズは小さな声でつぶやく。
デルフは魔法を吸収し、その分だけ伝説の使い魔であるガンダールヴの体を操ることが出来る。
よほど強力じゃない限りは……。
それに、飛ぶ弾は跳ね返せないかもしれない。怖い。
「……サイト生きてて、サイト」
＊
空が夕闇に染まる頃、ルイズたちはまだ遺体を捜していた。どこかにあるはずだ。
「遺体あるかもね」
コナンの小さな唇が言葉を紡ぐ。
遺体は殺されているならある可能性は絶対だ。
「遺体遺体……ああ、サイト！」
遺体という言葉を聞いて、目の前がフェードアウトしていくような状態になる。
思わず頭が狂いそうになった。
ギリギリのところで、
「ルイズさん、才人さんは大丈夫だよ！　とりあえず遺体を捜してからだよ！」
ルイズはコナンに励まされて、なんとか自我を保った。

そして、遺体を捜すことになった。

＊

竜禅院秀彦（りゅうぜんいんひでひこ）――竜禅院グループの会長。

竜禅院グループは、宝石産業などの産業界でその名を轟（とどろ）かしている有名なグループ企業だ。

ルイズはコナンの説明を聞いても、聞きなれない単語が多い。

だが、ルイズの世界でいうと貴族のような人で、多彩な事業に着手している有名な一家だとは理解した。

まだ、その一家の当主の遺体も見つからないし、手がかりは名刺だけだ。

サイトは何処にいるのだろう。ちゃんと食事しているだろうか。

怪我はしていないだろうか。

サイト、無事でいて。会ったら絶対元の世界に帰る方法見つけようね。

ルイズが黙考しているとコナンが、三人の歩いていた方向を指差した。

何かを見つけたらしい。

「……おい、あれ！」

コナンが指差した先には、地面に垂れたと思われる赤いものと指先が見えた。

「これって……！」

三人が近寄ってみると、倒れていたのは、体格からすると男性で顔はうつむきになっているため分からない。

服装は茶色の羽織のようなものに、サイトがいつも穿いているようなズボンに似た色のもの。

「……秀彦さんだ。もう死んでる。腹部と頭部に弾痕が一つづつ」

コナンの表情が鋭くなっていた。

二回撃たれたらしい。

その言葉を聞いて、ルイズの瞳孔が収縮する。

サイトのことが心配になり、大丈夫だよと言い聞かせていた自分の心に暗闇が出来ていた。
「どうやら、頭部を撃たれたのが致命傷のようだな」
コナンの口調と目つきが、がらりと変わっている。
まるで二重人格だ。
「しかし、殺されてから二日ほど経っているというのに、誰にも見つからなかったのはなぜなんじゃ？」
「ここは使われなくなってから、十年近く経ってるし、もう閉鎖されてるしな」
「じゃあ私たち不法侵入なの？」
「仕方ないよ。それに僕たちは才人さんがどこへ行ったのかまず手がかりを見つけにきたんだよ。だから、警察には才人さんのことは伏せるから。安心してルイズさん」
コナンは遺体を見たのにもかかわらず、意外に冷静だった。ルイズは見た瞬間に倒れそうになった。
なのに、コナンは遺体を普通にさわり、調べていた。
それに、阿笠博士も慣れているのかよく分からないが、最初は驚いていたが、段々と落ち着いていった。
普通ならひと目見ただけで、少し頭がおかしくなりそうなものだけど……。
それにしても、何で例の二人組は秀彦とかいう人を殺害したのだろう？
殺して何の得があるの？
秀彦さんは一番偉い人らしいから、何かを裏でやっていたとか？
でも、何で？
それに、例の二人組って何なのだろう。コナンにそれを話したとき、どこか彼の様子がおかしかった。
でも、コナンはまだ詳しいことは話せないと言っていた。それに、工藤新一の行方。
まだ分からないことがいっぱいある。

それは、どこかで話してもらおう。
そういえば、サイトを探していた時、彼の服を見つけたのを思い出す。
二人に話しておこう。あのことを。
「コナン、阿笠さんありがとうね。私頭が少しおかしくなっていたから、大事なことを二人に話しそびれていたの……」
ルイズは今まで抱きしめていた、才人の服のあの部分を二人に見せた。

パーカー（前書き）

私情により、更新を二週間以上空けてしまったことをお詫び申し上げます。
遅れてもしまい、まことに申し訳ありませんでした。
更新を待たせてしまい、本当にごめんなさい。

パーカー

「これは……血！」
コナンは才人が着ていたというパーカーを見て、思わず眼を丸くした。
血痕が服が首元にあたる部分に少しだけ――いやほんの少しついていた。
ルイズからパーカーを受け取ってほかの部分を調べてみたが、何も見つからなかった。
「才人くんは……」
阿笠が言葉を続けようとすると、
「あぁ、博士きっと何かの事件に巻き込まれた可能性があるぜ」
コナンの表情がさらに鋭くなった。
ルイズは倒れそうになっていたが、ギリギリのところで自我を保ったようだった。
しかしルイズの瞳が曇っている。無理もない。
「ルイズさん、ありがとう。これだけでも、大きな収穫だよ」
「うん。でも、これからどうするの？」
「とりあえず、警察に連絡するよ」
コナンたちはそのあと、警察に遺体を見つけたことを連絡して事情を説明した後（才人とルイズのことは伏せた）阿笠邸へと戻った。

＊

ルイズはけいさつと聞いたときよく理解ができなかった。
この世界は知らないことばかりだ。
才人もルイズの世界に来たときこうだったんだろうと思うが、受け入れて順応していた。
それに、ドラゴンとか知っているようだった。
後になって分かったことだが、けいさつはその地域の治安を維持

するため――つまり、そのところで起こったことを調べる機関らしい。
ルイズは改めてこの世界の仕組みに感心させられた。
阿笠邸に戻ってから、しばらく黙考していたもののこれからどうするのかコナンに聞いてみることにした。
「コナン、これからどうするの？」
「侵入するんだよ」
「え、それって駄目じゃないの？　ていうか、どこに？」
「竜禅院グループのパーティーに侵入するんだ。捜査するんだよ。駄目じゃないよ」
コナンの話によると、近々竜禅院家主催のパーティーがあるらしい。
会長が亡くなったのにもかかわらず、中止にはしないという。
「でも、どうやって行くの？　だってそのパーティーに集まるのって偉い人たちなんでしょ？」
ルイズにはそれが疑問だった。
どうやって参加というか、潜入調査するのだろう。
「大丈夫だよ。僕の知り合いのお姉さんが参加するみたいだから」
「でも、でもその人たちだけでしょ？」
「大丈夫だよ。その人の友人ってことなら。それにそのお姉さんの友達のお父さんが有名だし」
コナンの言っていることがいまいち理解できなかったが、どうやら侵入はできるようだ。
ルイズはサイトと再び会うために、燃えていた。
サイトと行方を掴むこと。それが第一目標なのだから。

パーティー（前書き）

久しぶりのアップですね……なかなか更新できなくて本当にごめんなさい。
次は来月ごろになりそうです……。

パーティー

「ったく眼鏡のガキんちょに……ガキどもが何でいんのよ」
「いいじゃないの、園子。コナン君、その子が親戚の外国人さん？」
ルイズとコナンと阿笠と灰原はパーティーに来ていた。ルイズは、コナンの親戚の叔父の従兄弟の息子のお姉さんということになっている。少し無理があったように感じたが、なんとかコナンは納得させたようだ。もちろん殺人事件に関わっていることや黒い服の男たちのことは伏せられている。
コナンの知り合いのお姉さんというのは、茶色の短髪に黄色の髪飾り（カチューシャというらしい）をつけた鈴木財閥のお嬢様だという鈴木園子。それに園子の友達で、コナンが居候先の娘だという――黒い長髪に、紫みのあるパッチリとした瞳をもつ毛利蘭。
そして蘭の隣に立っているちょび髭の男性は、彼女の父親で有名な探偵だという、眠りの小五郎こと毛利小五郎。
コナンと哀の通う学校の友人で、親が教師だという光彦、うな重とかいう料理が好きな元太、幼さを残し穢れをしらない瞳を持つ歩美。
「……ルイズです。コナン君が日本に来たと聞いて旅行がてらに会いに来たんですよ」
ルイズは皆の前でコナンと哀の考えたという台詞をそのまま喋るが、緊張して棒読みになってしまった。それが逆に恥ずかしくなって、頬が淡い朱色に染められる。ふと妖精亭でのことを思い出した。あの時も緊張して、つい言葉が詰まっちゃったんだけ。
蘭はこちらを熱心に見つめていた。ルイズのことが気に入った様子だった。
「ルイズさん、すっごいそのドレスに合ってますね」
ルイズは園子から借りた桃色のレース生地のドレスを着ていた。髪は偶然持っていた、黄金色のバレッタでひとつにまとめており、

傍から見ればまるで――小さな妖精のようだ。ドレスの豪華さが体型を隠してくれるので、ほとんど気にならなかった。

「いえいえ、蘭さんもとてもお綺麗ですよ」

今までこういうことを言うのには慣れていたが、喋ったことは嘘ではなかった。蘭は紫色の胸元が出ていないかわいらしいワンピースを着ている。蘭のスタイルはルイズから見てもとても抜群だった。あのメイドにも劣らないし、それに蘭は性格が優しくてしっかりしている。メイドは黒いところがあるが、彼女はそういう風には見えない。そして一言でまとめると蘭は非の打ち所が無いようにルイズの目には映った。

彼女が何処かカトレアに一瞬見えて、故郷を思い出す。そして暖かい包容力を身に纏わせた彼女は一緒に居て安心できるような存在だとルイズは感じていた。故郷を思い出したとしてもなんとかここでやっていけそうだ。

「ルイズお姉さんきれー」

歩美がルイズのほうへ寄ってきた。かわいらしく年相応の素直さを残していて、この子ぐらいの年の子に懐かれるのは悪いことではないし、寧ろ微笑ましくもなる。サイトがいたらもっとパーティーを楽しめたかもしれないのに――サイトのことがふと頭をよぎった。今日は捜査だ。パーティーを楽しみに来たわけじゃない。

コナンの方を見ると、彼は捜査をしに来たのにもかかわらずパーティーを楽しんでいる様子だった。

「コナン、どうするの？」

「――お話とか聞く前に、しばらく楽しもうよ」

コナンはルイズの腕を引っ張た。ルイズはコナンに押されるままに、テーブルの食事に目を落とす。見たことも無い食材と調味料で作られた料理をルイズは皿を手にして、一口頂いた。

食べていると、懐かしいにおいがルイズの鼻腔をくすぐった。ワインの匂いだった。給仕のものが配っているものだったらしい。思

わずとりたくなってしまい、グラスを取ろうとすると、
「駄目だよルイズさん、お酒なんか飲んじゃ！」
ふと、誰かの手がルイズのグラスを取ろうとする手を遮った。
「え？」
ルイズは何が起こったのかとよく理解できてない顔で、遮った人を見た――蘭だった。彼女は先ほど見たよりも鋭くはっきりとした口調で、
「この国ではお酒は二十歳からなんです」
「あ、そうだったの。ごめんなさい」
蘭の話によると、日本でお酒を飲むことができるのは二十歳かららしい。サイトもルイズの世界へ来たときに飲んでいたわよねと思いつつも、諦める。
この世界にはルイズの戸籍や身分などは存在しない。法律は適用されないとしても、今の立場はコナンの親戚のお姉さんだ。もしそれがばれたらこのままじゃいられないのは目に見えている。
ルイズの世界では十六歳でもワインを飲める。ふと故郷が懐かしくなるが、ここは我慢しよう。しかし、サイトがルイズの世界の方へ着てから酒を飲んでいたが、二十からなんて凄く厳しい国なんだなぁと思う。それとは裏腹に、どこかサイトの故郷である此処はとても犯罪の起きたりしない平和な国に見えた。でも、それは表面上だということを思い知らされる。
今、傍にいる歩美たちや、蘭たちが笑っていられるのはそんな世界とは無縁なのかもしれない。しかし、あのコナンや哀はそれをあの年で知っている――なんて悲しいことなのだろう。知らなければ、幸せなのかもしれないのに。ルイズの世界だって結局は同じなのかもしれない。
「コナン君も……気をつけなくちゃ」
蘭が傍で呟いていたのがはっきりと耳に届いた。

パーティー2（前書き）

予定より早く書き終わりましたので、投稿することにいたしました。
サイトが出るのはもう少し先になりそうです。

パーティー2

「コナン、どうするの？　私たち手がかり掴みにきたんじゃないの」
ルイズはコナンにこれからどうするのか気になって尋ねた。コナンは相変わらずパーティーを楽しんでいる。彼の意図も行動も全く読めないで入る。何をしに来たのか彼はちゃんと理解しているのだろうか。
「ルイズさん、今日は潜入調査だよ」
コナンの話によると、いきなり行動を起こしても意味など無い。潜入調査なのだから、今はサイトのことを掴みにきただけ。しかし、それとは別にコナンはどこか気になっているようなことがある様子に見えたのだが、ルイズはあえて聞かなかった。いつか話してくれるとコナンは自ら言ったのだから、必要な時が来るまでは聞かないほうがいいかもしれないからだ。
そうすれば二人組のことを教えてくれるかもしれない。しかし、あの竜禅院秀彦を殺害した人物は二人組のどちらかなのは間違いなかった。あの男性二人の様子からするに、眼光が鋭い方だろう。
ルイズにはそこまでは分かったのだが、結局あの二人の素性も分からずじまいだ。せっかくパーティーに来て、その二人に繋がることやサイトのことが分かるかもしれないのに、コナンは何をするつもりなのだろう。
「あ、出てきたよ！」
コナンが指差した方には大きなドアがあり、外から二人男女が入ってきていたのが見えた。
「二十代くらいの女性が竜禅院グループの会長の孫の竜禅院理穂さん」
コナンが視線を向けた先にいたのは、目の周りをうす紫の化粧でぬっている女性だった。口元は見事な赤い口紅でたたえられ、宝石が軽くちりばめられたパーティードレスを着ている女性が立ってい

る。女性は悠然とした瞳を、参加者たちに向け軽く微笑みかけた。
この世界の人は本当にお洒落だ。ルイズが工藤新一を探しに来たとき見た街の人々以上の豪勢さだ。そういう部分では貴族とは変わらないのかもしれない。
「で、あの派手な黄金色の燕尾服を着ているのがグループの相談役の竜禅院路也さん」
次にコナンが教えてくれたのは金色に輝く服を着て、白いひげを鼻の下に口の周りを囲うように生やしている男性。その格好にはルイズもドン引きしてしまいそうなぐらいに派手好きな人のようで、腕には宝石のアクセサリーをたくさんつけている。まるで一代で財を成した役人のようだ。貴族でも時々あんな人を見る。
「次に、黒いタキシードを着ていて金色の目を持ち、ブロンドの髪で外人のような容貌の男の人は、バスケ選手の竜禅院真吾さん」
バスケというのは良く知らないが、真吾という人物は体を使う競技の選手らしい。肩幅が広くがっちりとした体型がそれを証明しており、若干皮膚は焼けていたが、どこか顔つきはまだ若かった。
「今、竜禅院の人たちでいるのは今、僕が紹介した人たちだけだよ」
「コナン、すごいね」
ルイズは、コナンに官服して彼が教えてくれた人たちに視線を落とす。一番このパーティーで目立っているのはやはり路彦という人物なのだが、まさに金持ちという立場を表しているような人だ。コナンにいわせれば成金らしい。言葉の意味はよく分からなかったが。

パーティー2（後書き）

一度公言したことははずせないのですが、まことに更新遅くなって申し訳ありません。
私情によるものなのですが、本当にごめんなさい。
毎日読んで下さっている方がいらっしゃるようで、本当に申し訳ないです。
月に2回ほどは更新していこうと思います。

パーティー3（前書き）

ＨＮを変更させていただきました。

パーティー3

「あれ、コナン君！　それおいしそうだね」
「あぁ、蘭姉ちゃん！」
二人がパーティーを楽しんでいると、蘭がやって来た。ルイズは観察しながらも、蘭に目をちらちらと向けた。彼女は口元にまるでカトレアのような微笑をたたえていた。彼女とカトレアが同時に重なった。さっきみたいに。
しかし、コナンの態度の変わりようにはやはり驚きざるを終えない。まるで子供でないような鋭い顔と蘭たちに見せる子供を演じてるかのような姿。ルイズが異世界から来た人間という秘密のように、やはりコナンも自分と同じように何かを隠しているらしい。――彼もルイズと同じ普通の人間じゃない。きっと。
「コナン君、さっきすごい顔をしてあの人たちを見てたけど？」
蘭が首を軽くかしげて、コナンに尋ねていた。彼は少し目を逸らしていたが、
「なんでもないよ、蘭姉ちゃん。ただ、あの人って随分派手だなぁって」
彼はすらすらと答えていた。コナンは演じることがどうやら得意らしい。
ちなみに蘭の言ったあの人たちとは、竜禅院の人たちのことだろう。コナンはどうやら捜査のことなどを隠しているようだった。潜入するときにも園子たちには、詳しいことを話していない様子だったからだ。彼は何を隠しているのだろう。毛利探偵という人に言ったほうがいいのではないか。
でもルイズが観た二人組は危ない人たちだってコナンが言っていたことを思い出した。もしかしたらコナンは蘭たちを巻き込みたくない何かがあるのかもしれない。それに哀は詳しいことを知っている様子だった。ルイズがコナンとパーティーを楽しんでいるときも、二

人で話していたから。
哀もきっと何かがあるのだけれどいつかコナンが言ったみたいに話してくれる。今は話したくない何かがあるに違いないのは確かだ。
「――サイトって本当にあなたの友人なの？」
耳に届く落ち着いた美声。大人の雰囲気をまとわせたその言葉は、ルイズの目を見開かせようとしているでもようだった。
「あ、哀ちゃん？　うん。大事な友達だよ」
ルイズは口の端に苦みを残しながらも、冷静に答えた。嘘じゃないんだ。大事だって事は。自分でもサイトのことは大切だと思っている。それの二度と失いたくない存在には間違いないから。彼はただの使い魔じゃない。
もし彼がいなかったらルイズはこの先多分やっていけない。彼と会ったときはあまりそこまでは感じなかった。でも今は自分以上に大きな存在になっている。彼が傍にいるだけでとても安心するのだ。心の奥まで温まるような思いになる。
「そうなのかしら……まあいいけれど」
哀は納得していない様子だった。確かにそうなってしまうのかもしれない。
「いつか話すわ。今は駄目なの……」
異世界から来たことを話す覚悟はしておかなきゃいけない。自分は今頼っている身だ。パーティーに来れたのも全てコナンのおかげなのだから。

パーティー3（後書き）

レイアウト変更致しました。読み辛いのでしたら、遠慮なくおっしゃってくださってかまいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1189m/

ルイズと名探偵

2010年11月9日09時10分発行